

## 産学官連携建設人材共育フォーラム（概要版）

と き :平成28年11月21日(月) 14:00~16:05

と ころ :コンパルホール3階 多目的ホール(大分市府内町1丁目5番38号)

参加者数:169名

### < プ ロ グ ラ ム >

14:00~14:15 開 会

主催者挨拶

おおいた建設人材共育ネットワーク 会 長 園田 一則

関係者代表挨拶

大分県土木建築部長 阿部 洋祐

14:15~15:00 基調講演

「未来の子どもたちへの贈り物 ~正しい考え方を求めて行くと未来が見えてくる~」

講 師 :株式会社 コイシ 代表取締役 小原 文男 氏

15:00~15:10 休 憩

15:10~16:00 リレートーク

「私たちが描く建設産業の未来 ~若手技術者の夢への挑戦~」

コーディネーター:大分工業高等専門学校 都市・環境工学科

教 授 亀野 辰三 氏

意見発表者:(株)日建コンサルタント 設計部 設計課

技 師 荒木 五月 氏

三浦国土建設(株) 工事部

主 任 長尾 健矢 氏

国土交通省 九州地方整備局 大分川ダム工事事務所 調査設計課

調査係 津口 裕己乃 氏

大分県土木建築部 大分土木事務所 道路課 保全第一班

技 師 亀井 康平 氏

大分市土木建築部 建築課

技 師 亀井 奈保子 氏

日本文理大学 工学部 建築学科 環境・地域創生コース

4 年 安部 正吾 氏

大分大学大学院 工学研究科 福祉環境工学専攻

2 年 山崎 基弘 氏

大分工業高等学校 建築科

2 年 井上 栞 氏

16:05 閉 会

「未来の子どもたちへの贈り物 ～正しい考え方を求めて行くと未来が見えてくる～」

▼講演要旨

○コイシが目指す取組み

建設業のように経験値を求められる分野において、不足する経験値を補うためには、最先端技術の活用が欠かせない。立体可視化することで完成形を具体的にイメージできるようになり、経験の少ない人でも作業しやすくなるため、様々な智慧を得ることができる。

このように「現場に役立つ」、「現場が楽になる」、「わかりやすい」ように改善していくことがコイシの目指す取組み。

○これからの土木

どんなに立派なモノを造っても、豊かな山や川や海を汚してしまっただけでは評価に値しないし、仕事への「やりがい」や「働きがい」も感じない。

これからの土木は、三浦梅園(大分県国東市出身の哲学者)の教えのように、「自然の力(天境)を活かし、人の知恵(人境)を入れて、こころ豊かなものを創造して行く」ことが肝要。例えば、自然のしくみを阻害しているものを改め、撤去ではなく、元に戻すのではなく、少しの修正を加え、上手に活用していく。そんな人の知恵や工夫で自然を豊かにしていく仕事が、私の考える「やりがいある土木」であり、このような「環境土木」が今後、新たな市場として開拓されていくのではないかと。

確かな土木の未来を築くためには「学び」と「人づくり(心づくり)」が何より重要、加えて i-Construction のような最先端技術を積極的に活用できる環境整備が必要である。

○あるべき姿

- ・教育：土木の課題を解決していくことのできる若者を育てていくには、現実として今ある課題を伝え、理解してもらい、その課題を解決していくために皆で智慧を絞り出していくことが肝要。今一度、何のために何を学ぶのか、人としての生き方を問い、自ら実践の中で学び、改善していく必要がある。
- ・行政：「土木のやりがい」に結びつく税金の価値ある活用。日々現場で泥だらけになって働く人たちが報われる環境整備など、多くの人々に喜ばれる仕事をしてもらいたい。
- ・産業：自然を手本に学び、そこに人間の智慧を入れ、こころの豊かさを追求していくこと。地場の建設業が愛されていくよう、正しい考え方を持って進んでいかなければならない。

○最後に

土木は今後ますます必要とされ、また、これほど大切な仕事はない。「やりがいある新たな環境土木市場」を私たちの手で作り、未来への一步を踏み出しましょう。



講師：小原文男氏  
(株式会社 コイシ 代表取締役)

「私たちが描く建設産業の未来 ～若手技術者の夢への挑戦～」



▼ 趣 旨 ▼

若い人や女性に敬遠される職業・産業に未来はないといわれながら、大分では今まで建設産業に関わる若い人や女性たちが、その思いを発信する場がなかった。そこで、おおいた建設人材共育ネットワークの設立に伴い、産学官それぞれの立場で今思っていることを自由に発表し、お互いを知ることで相互理解を深めることを目的に、リレートークを実施。

▼ 発表内容 ▼

発表者 1

**荒木 五月 氏** ((株)日建コンサルタント 設計部 設計課 技師)

○高専で土木構造物の重要性を学び、この業界への就職を決意。就職活動中は求人票で女性不可等の表記を目にし、業界への不安があった。しかし、就職してすぐに実務についたり、女性技術者を積極的に受け入れる職場環境があった。また、結婚・出産による仕事への影響も心配していたが、福利厚生や育児休暇を利用した資格取得への支援等があり、仕事に対する不安を取り除けた。

○建設産業の高齢化が問題となっているが、見方を変えると、若手技術者1人に対しベテラン技術者3人からの指導を受けることができると考えられる。これからは新設から維持管理の時代へとなり、設計の新しい知識や現場での実績が必要となるが、経験を多く積んでいるベテラン技術者から教を乞うことができるのは大きなアドバンテージになる。

○人手不足の解決に向けて業界が団結して取り組んでいるなか、一人一人の技術者はスキルアップをするチャンスだと考える。昔からの知識を引き継ぎ、新しい知識を身に着け経験を積み一つの技術を作り上げる。このことが『建設産業の明るい未来』へとつながる。これからも前向きに自分の仕事に誇りをもって設計業務に取り組みたい。



## 発表者 2

### 長尾 健矢 氏 (三浦国土建設(株) 工事部 主任)

○高校生の時に測量機器に触れる機会があり、まず測量に興味を持った。専門学校に進学後、測量だけでなく土木全般の勉強をし、現在の職場に就職。



○建設業の魅力とは・・・

- ①人のために役立つ仕事……人々が安心して暮らせる社会をつくることができる
- ②工事完成時の達成感……現場での達成感を得られると仕事の面白さもわかり、仕事を続けられる
- ③誇れる仕事……人々が安心して暮らせる社会づくりに携われていることに、誇りとやりがいを持っている

○人材を増やすためには・・・

- ①職場環境の改善……上司や先輩に気軽に相談や質問ができる環境があると、新人が一人で課題等を抱え込むことも減り、離職を防げる
- ②建設業に触れる・聴く機会を増やす……現場の人の生の声を聞くことで業界の状況をより知ることができ、仕事に対する不安を少しでも取り除くことができる

○学生へのアドバイス・・・

- ①何にでも興味を持つ……ものづくりの不思議さに気づくと仕事も楽しくなり、自身の技術向上のきっかけとなる
- ②迷った時もまずは自分で考える……自分の考えを持つことは自身のスキルアップへとつながる
- ③ひとつの工事の完成まで頑張る……ものづくりを通じて誇れる仕事ができたと、そこには特別な喜びがある

## 発表者 3

### 津口 裕己乃 氏

(国土交通省 九州地方整備局 大分川ダム工事事務所 調査設計課 調査係)

○もともと河川の治水に興味があり、人々の暮らしを守る仕事をしたいと思い、現在の仕事に就いた。

○ダム周辺の環境調査を主に担当。水域や植生、堆砂の状況を観察。日々の蓄積がダム事業の環境調査のバックデータとなっている。

○最近は現場監督の仕事も担当するようになり、鉄筋の間をくぐって検査等を行っている。

○今後の目標・・・

- ①女性技術者として、自分らしさを生かせる仕事を探し、男性にも負けないように働きたい。また、女性技術者がたくさん入るような職場環境づくりに貢献したい。
- ②事業に関わった多くの人の熱い思いを忘れず、異動後も周りに自慢できる現場をつくりたい。



#### 発表者 4

##### 亀井 康平 氏 (大分県土木建築部 大分土木事務所 道路課 技師)

○父親が土木の仕事をしており、その姿に憧れ土木に興味を持った。

○現在は工事発注や現場監督に加えて、年間 1000 件を超える地元からの要望の対応、災害・異常気象対応などもあり、多忙な日々を送っている。

○これからの土木は『守り・紡ぐ』時代へと変わっていくことが考えられるが、人員不足やそれに伴って技術の継承ができず技術不足が生じている。

○課題解決に向けて、より若い世代（小学生・中学生）へ土木の魅力を伝えることが必要。また、若手技術者が自発的に技術の向上を図ることも必要。

○今後の目標として、知識・経験を活かして県民のために仕事をするのはもちろんだが、造る側も喜ぶ現場づくりをし、また一緒に仕事をしたいと思ってもらえる技術者になりたい。そして、県民の笑顔をつくる事業を行い、土木の魅力を伝えられる人になりたい。



#### 発表者 5

##### 亀井 奈保子 氏 (大分市土木建築部 建築課 技師)

○子どものころは建築に興味はなく、20 歳くらいまでは別の仕事に就くを考えていた。しかし、いつからか形に残る仕事がしたいと思うようになり、建築の道へと進み始めた。きっかけは恐らくエンジニアだった父親の影響だろう。

○現在は幼稚園、小・中学校など文教施設の工事を担当。仕事の中での一番のやりがいは、完成後の校舎から子供たちの喜ぶ声を聞いたとき。

○建築の業界は女性技術者が増えてきてはいるが、まだまだ少ない。ただ、少ないながらもやりがいを持ち楽しく仕事をしている。女性だから気づけるところもある。限られた予算の中ではあるが、女性ならではのカラーを現場で発揮したい。

○現在は子育てをしながら働いており大変な面もあるが、結婚後も仕事を続けられる今の仕事に就けて良かったと思っている。子どもにはさみしい思いをさせることもあるが、親の仕事に誇りを持ってくれている。

○自分の働く姿を見て多くの人に建築の世界を目指してもらおうのが今後の目標。

○これからも子どもに誇れるように、毎日笑顔で家に帰れるように日々の仕事を楽しみたい。



## 発表者 6

### 安部 正吾 氏

(日本文理大学 工学部 建築学科 環境・地域創生コース 4年)

○父親が建設関係の仕事をしており身近な職業だった。休みの日に父親が関わった現場の話をたくさん聞き、今後は専門的な話を一緒にしたいとも思い、建設産業に興味を持った。

○中山間部集落を題材とした実習に参加し、技術者の視点で地域の人と関わり課題の発見や対策の発案などを行い、主体的に考え行動する力を養った。

○企業等の現場見学を通して、大学での学びが現場でどのように活用されているのかを知ることができ理解が深まった。

○4月からは社会人になるが、大分の発展に寄与し、大分を盛り上げる仕事をたくさんやっていきたい。



## 発表者 7

### 山崎 基弘 氏

(大分大学大学院 工学研究科 福祉環境工学専攻 修士2年)

○スタディ（ものをつくるためのプロセス）とリアル（建築がつくられている現場や社会）の間で日々揺れ動いている。

○建築の勉強を始めたのは高専に入った15歳のころ。だが、学校の授業は自分の勉強したい建築の内容とは違うと感じ、将来この業界に進んでいって大丈夫なのかと悩む学生生活だった。大学編入後も建築以外の仕事に就こうかと揺れていた。しかし研究やインターンシップ等を通じて、学んでいることとこれから進むリアルな建築の現場が少しずつ繋がって見え始めた。

○建築との向き合い方が変わった出来事の一つに建築設計事務所でのアルバイトがある。建築家の下で学んだことで、大学での模型作りやCG作成の授業が実際の現場でどのように結びつくのかが分かり始めた。また、新竹田市立図書館の設計者選定プロポーザルにも携わった。竹田の人に思いが届き建築の面白さを感じた。

○学校で学ぶだけでは退屈に感じ、まちの中でリアルな部分を学ぶことで建築に対する感動を持つきっかけになった。学校と社会を繋ぐ窓口があると魅力的なまちづくりや人づくりができるのではないかと。



## 発表者 8

### 井上 栞 氏 (大分工業高等学校 建築科 2年)



○中学3年生のとき、テレビ番組の『ビフォー・アフター』を見て建築に興味を持ち、番組内の匠のような設計士になりたいと思い、今の学校に進学した。

○授業を通して、建築はとても細かい世界だと知った。模型製作の実習で小さな誤差が他の箇所にも影響することを経験してその難しさを感じ、繊細さが必要だと思った。

○インターンシップでは、様々な職種の人が自分の仕事に誇りをもって仕事していることを知った。

現場監督さんは臨機応変な対応が必要。強い気持ちを持たなければ仕事ができないことを知り、私ももっと強い人間になりたいと思った。

○高校生活での今後の目標は成績が上位に入るよう頑張ること。それを実現するために毎日A4ノート1ページ分勉強することを続けている。

○就職したら女性の器用さを発揮し、建設業界でも活躍している女性がいることを世の中に知ってもらいたい。また、技術向上のために海外でも仕事をしたい。そしてSNSなどを通して世界中に自分のことを知らない人はいないというような大きく立派な人間になりたい。

○建築はみんなでものをつくっていくので、これからいろいろな人とコミュニケーションをとり、精神的に強い人になりたい。

## コーディネーター



### 亀野 辰三 氏

(大分工業高等専門学校 都市・環境工学科 教授)

#### 若い技術者へ贈る言葉

世の中はますますグローバル化し、海外で仕事をする、あるいは外国人と仕事をする時代が来る。専門力と語学力をつけて技術者としてのスキルアップを目指してほしい。

- ①明確な目標を立てる (Plan)。
- ②周りの人とコミュニケーションを図れる個性を持った技術者になってほしい (Personality)。
- ③積極的に海外に出かけ、視野を広げる (Ambitious)。
- ④社会に役立つ仕事に従事している誇りを持つ (Pride)。

建設産業における P P A P を持つことで、一人ひとりが魅力的な人間になり、建設産業全体のイメージアップにつながっていく。若いひとは人間力で勝負する技術者になってほしい。